

# 東日本大震災における被災地社叢調査報告

## NPO 法人社叢学会東日本大震災被災地社叢調査団

NPO 法人社叢学会では東日本大震災被災地における社叢の状況を調査するため、調査団を派遣した。以下は、調査報告である。

調査日：2011年8月1日（月）～8月4日（木）

調査者：A班（宮城県） 渡辺弘之・伊藤和男・増井啓治・武田一宏

B班（宮城県・岩手県） 藺田稔（団長）・糸谷正俊・橋本完・恵谷真・岡田文重

調査行程：

### A班

8月1日：宮城県神社庁（調査協力依頼） 宮城縣護國神社 青麻神社（以上仙台市）

8月2日：波分神社 天照皇大神宮 八幡神社（以上仙台市） 山王宮 下増田神社・潮塚（以上名取市） 稲荷神社 竹駒神社（以上岩沼市）

8月3日：志波彦神社・塩竈神社（塩釜市） 稲荷神社（東松山市） 稲荷社 伊去波夜和気命神社（以上石巻市） 熊野神社（女川町） 葉山神社（石巻市）

### B班

8月1日：横山八幡宮 藤原比古神社 熊野神社（以上宮古市）

8月2日：大槌稲荷神社 小槌神社 赤坂八幡宮（以上大槌町） 尾崎神社 天照御祖神社 熊野神社（以上釜石市） 加茂神社 貴船神社 八坂神社 神坂熊野神社（以上大船渡市）

8月3日：松峰神社 月山神社 天照御祖神社 今泉八幡宮（以上陸前高田市） 紫神社 八幡神社 尾崎大明神（以上気仙沼市） 上山八幡宮（南三陸町） 熊野神社（女川町）

8月4日：日和富主姫神社（名取市）

## 被災地社叢の現況調査結果のまとめ

### A班

東日本大震災による神社あるいは社叢への被害は、地震のそのものによる被害よりも、津波による被害の大きいことが特徴である。このことはやや内陸にあり、津波の被害を受けなかった青麻神社（仙台市宮城野区）、竹駒神社（岩沼市稲荷町）、志波彦神社・塩竈神社（塩釜市一森山）などが震度6の大きな揺れを受けながらも、被害が比較的軽微であったことでもわかる。

一方、海岸沿いで、津波の直接の被害を受けた仙台市宮城野区蒲生の天照皇大神宮、宮城野区荒浜の狐塚、仙台市若林区井土の八幡神社、名取市井上浜の山王宮、同下増田の下増田神社、岩沼市下野郷浜の稲荷社、石巻市雄勝町の葉山神社、同南浜の稲荷社、同大宮町の伊去波夜和気命神社、女川町石浜の熊野神社、東松島市北上運河の福殿稲荷社などは津波により壊滅的な被害を受けていた。被害の程度は津波の高さ、地形などで異なるが、社叢にかろうじて残るアカマツ・クロマツなどの高木の枝先にゴミがひっかかっていること、周辺集落の病院、学校、アパートの3階までの窓がすべて抜けていることでも、

津波のすごさがわかる。

とくに激害地の仙台市宮城野区の蒲生天照皇大神宮、若林区の八幡神社、名取市の下増田神社、岩沼市と石巻市の稲荷社、東松島市の福殿稲荷神社などでは津波により社殿はなくなり、社殿の土台や倒れた灯籠、狛犬などでその所在が確認できるだけであった。

このような場所に宮城県神社庁では神社所在を示す標柱を立てるという計画をもっているが、すでに一部地域では復旧・復興の工事が進められており、ブルドーザーが動き回っていた。更地にするまえに、神社の境界を明確にし、早急に標柱を建てた方がいい。

これだけの被害を受けながらも、倒れた鳥居や擬宝珠の上に賽銭がおかれ、陶製の壊れたキツネが一對に並べて置かれていた。その行動には胸を打たれるものがあった。

津波被災地であってもわずかの小山、高台にあることで、社殿が傾くなど大きな被害を受けながらも、名取市の山王宮、石巻市の葉山神社、伊去波夜和気命神社（大宮神社）、女川町の熊野神社などでは社殿も社叢も残っていた。わずかの高台にあることで助かったこと、避難場所として機能したことなどで、神社・社叢の存在をありがたいものと受け取られていた。

しかし、神社そのものが消失したところでも、あるいは被害を受けながらも神社は残ったところでも、周辺地域は壊滅的な被害を受け、集落そのものが消滅している。津波被害地域への住宅の再建は再度の津波警戒から認められないようであるし、実際、周辺集落の再生はむつかしいと思えるものがある。神社の再建、社叢の復旧は、氏子・地域のコミュニティの存在がなければできないことであろうが、神社所在地については、ともかくも公園緑地などとして残すことを計画した方がいい。

とくに、津波被害を受けながらも、わずかの小山・高台にあり、社殿・祠・社叢が奇跡的に残された仙台市宮城野区荒浜の水田の中に数本のクロマツやアカマツで囲まれた狐塚、仙台空港近くで大きな被害を受けているものの社叢の残る名取市下増田の下増田神社、社殿は傾くなどの被害を受けているが大きなケヤキをもつ社叢に囲まれた名取市井上浜の山王宮、海岸近くにありながらも小山の上であり、避難場所としての役割を果たした石巻市大宮の伊去波夜和気命神社（大宮神社）などは震災を忘れないための記念として残すことを考えたい。

しかし、これら残された社叢も実際には海水の影響を大きく受けており、調査時にも葉が変色するなどしていた。社叢・樹木の生育を経過観察するとともに、一部地域では施肥、補植などが必要であると思われた。

## B 班

### 【社叢概況調査】

- ・調査対象社叢は、概ね背後林、境内広場林、参道林が見られたが、社叢の発達していない神社もあった
- ・背後林の植生はスギ林が多く、境内林もスギが優先しているが、サクラなどの植栽地も多く見られたほか、ケヤキ、スギ、モミ、アカマツなどの巨木・御神木も見られた。
- ・参道林はスギ、マツのほか、ケヤキ、コナラなどの落葉樹もあった。
- ・ただ、背後林、境内林、参道林の区分がしにくい社叢も多い。
- ・概して手入れがいきとどいているものが多かったが、社務所のない小規模な神社では、荒れた社叢も散見された
- ・とくに被災した神社や、神社の被害が軽微でも氏子の多くが被災した神社では、社叢の手入れが不十分になり、林地が荒れる恐れもある

- ・津波被害により変色したスギ、葉のつかないケヤキ、火災により根元が焦げているスギ、全体に炭化しているマツなどがあり、保全・育成を検討するためには今後の継続的な観察が必要であるとともに、一部で変色していたタケ類の回復が見られるなど、被災後の社叢の変化が早いため、定期的な観察調査も欠かせない、と思われた

#### 【聞き取り調査】

- ・聞き取り調査の結果、ほとんどの神社と社叢が津波襲来の際に緊急の避難地となり、その後も被災者の応急生活の場となった。
- ・また火災の焼け止まりとなった林もある
- ・神社や社叢が果たした、津波からの避難地、防火帯、応援が来ない三日間程度の緊急生活の場、その後の応急生活の場といった役割は、本来、歴史的に神社とその森が果たしてきた防災効果であり、近代化された都市・地域社会においても依然として効果的であったといえる
- ・逆に、防潮堤、指定避難場所などの近代的防災施設が、想定外といわれる巨大津波の前にあまり機能していない場合もあった
- ・古くから地域に根付いていた神社・社叢には、水があり、薪で暖がとれ、ろうそく、非常食、布団（座布団）、畳の広間、かまど、その他の備えがあり、これらが住民の命を守る拠り所になった
- ・被災地において神社・社叢が果たしたこれらの防災的な役割は、もっと強調されて良いと思われた
- ・しかし、神社と自治体との関係は、かならずしも緊密でないことも多く、せっかくの防災的機能が災害時に発揮出来なかった例もある
- ・神社や社叢の持つ防災性能を、復興のまちづくりや他地域の防災まちづくりの中でどのように活かしていくのが、一つの課題である
- ・そのなかでは、自治体との連携方策についても、深く検討を進める必要が有ろう。
- ・また、A班の報告でも指摘されているが、仙台平野の被災地に残っている社叢は、被災者の心の拠り所となっており、この保全・再生に向けた取り組みが急がれる

# 東日本大震災被災地社叢調査に参加して

社叢インストラクター

増井 啓治

2011年8月の初め宮城県の海岸部に位置する神社について社叢被害調査に廻ったときに感じたことをここに記憶しておくものである。

広大な仙台平野が東に広がり海に接するところは南北に連なる海岸砂丘となり、マツの防風林が帯となって陸地を縁取っていた。このマツ林に囲まれて、江戸時代に開削され東回り航路の一部を成した貞山運河が静かに水を湛えていていた。しかし、マツの防風林に近づいたとき、付近の様相が一変していることに気づいた。マツの樹幹は陸地側に大きく傾き、赤くなって葉を少なくした樹冠から空が透けて見えた。マツ防風林の中に入ると、樹幹の高さ4～8mの部分の海側の樹皮が大きく剥ぎ取られていたり、なかには樹幹が倒れたり幹折れしたりしているのが見られた。場所によっては、数十mに亘って立木がまったく見られず防風林が根こそぎ途絶えているところがあった。

防風林の内陸側に面した場所に、石の鳥居や石灯籠が壊れて散らばり、辛うじて残った祠のコンクリート製の基礎の上に直に置かれたお賽銭が神社であったことを教えてくれた。散らばった狛犬やおキツネさんなどが集められ、ここが元の場所であるかのように据えられていた。救助や捜索に復旧作業に関わった人たちが集めて祀ったのであろうかと想像された。神社の跡から内陸を見ると、残った家屋の基礎があちこちに見えることから家々が建ちなんだ集落であったことがわかる。かつて集落が出来たときに神社が祀られ、集落と神社が一体となって営んできた時間の積み重ねが一瞬にして途絶えたことを感じさせた。そして、集落跡の内陸側には平らで広い農耕地がどこまでも続いていた。昨年までなら見渡す限りの水田にイネが青々と茂って夏の陽を浴びていたことだろう。今年は砂泥や瓦礫に深く埋まった田んぼには一面の緑色をしたイネ科雑草が繁茂している様子が見える。そこには復旧作業に関わる大型車両と作業にあたる人たちの姿だけがあった。これが震災5ヵ月後の仙台平野海岸部の防風林に接した小さな神社跡のマツ林社叢から見た風景である。

このように神社・寺院などの森である社叢を存立させる社会的基盤としての地域社会は、集落の物理的破壊と生業の喪失によりいったん崩れた。今後の復興事業において、新しい集落が高上げ地盤の上での再建であれ高台移転による集落再建であっても、新たに築かれる土地には集落構成員を求心する核が必要だ。殊に、地域の共同作業の上に成り立つ側面が大きい農業・漁業地域における集落づくりでは、地域社会を



仙台市若林区 矢幡神社

構成する一人ひとりを結びつけ共同体意識を醸成する仕組みが求められる。そのためには住民が神社・寺院などの宗教的な場を創設することを選択できる余地が必須である。そして新しい神社や寺院には伝統的な機能もさることながら新集落のコミュニティづくりのコアとしての活動が求められ、そうして生み出された新しい集いの場が社叢再創造の社会的基盤をつくりあげると考えた。

社叢学会は再建される集落における社叢づくりの一助になりたいものである。まずは、社叢学会総会は福島か宮城か岩手あたりで開催されることを願った。そして、繰り返し被災地を訪れる活動のなかで、社叢学会の活動分野が広がることを期待した。

---

---

## 三陸海岸の社叢調査に参加して

### —社叢インストラクターの一視点からみた復興計画に関して—

社叢インストラクター

橋本 完

---

---

三陸海岸の社叢調査から五つのポイントを記す。

#### 1. ランドマークとして機能する社叢と景観

大船渡市赤崎町跡浜にある八坂神社は、大船渡湾に面した標高 30m 程の高台にある。境内の南側からは湾を見渡す位置に、二本スギが植えられており、この間から標高 68.2m の赤崎岬が神奈備としてよく見えるようになっている。振り返ると拝殿が鎮座しており、南北軸上に位置する。この岬の右手の海上に、珊瑚島というお椀を伏せたような島もよく見える。そして、この島の東側に縄文中期の貝塚があり、国指定の蛸ノ浦貝塚になっている。

また、境内へ上がる参道からは、東北東に二上山のような神奈備がよく見える。この山の麓には、大洞貝塚がある。この神奈備との間に横切る後ノ入川の側に、四本のケヤキがランドマークとして聳えている。一番高いケヤキの樹高は 24.2m、胸高直径は 81.5cm あった。また、木の幹に津波の浸水高さが刻印されており、樹皮が赤茶けた色に変色していた。前面道路から、高さ約 90cm、冠水していたとおもわれる。

#### 2. 復興のシンボルとなる社叢

陸前高田市の広田湾に面した砂浜には「奇跡のマツ」としてマスメディア等で紹介され、復興のシンボルとなっているマツがあるが、この広田湾に注ぐ気仙川を少し遡った右岸の今泉天満宮に、樹高 31.7m の「天神の大杉」というご神木がある。周辺部は津波で流されて壊滅状態の中、生き残ったスギである。塩害で葉が茶褐色になっており、周囲の土壌を入れ替え、散水用のホースが整備され、ロープで区画されて立ち入りを制限していた。

#### 3. 地勢に基づいた社叢の修復について

数箇所の社叢で感じたことであるが、幹線道路を掘削した折、平地に突き出た岬部分に相当する社叢だけが取り残されて、幹線道路によって本来の社叢が分断されてしまっているのを垣間見た。このよう

な社叢をもう一度、元の生態系を維持する為に人工的にトンネルなどを設けて掘削分断されてしまった社叢の地勢の回復を計ることも、一つの手法である。また、トンネルを盛土するために、震災ガレキを活用することも一つの方法である。

#### 4. ご神木と社叢について

ケヤキ、モミ、スギ、アカマツ、ヤブツバキ、ヒノキ、シラカシ、アスナロ、マツなどが意識的に注連縄などを張り、ご神木として整備されていた。

中でも大槌町上町の小槌神社境内には、一本のモミがご神木として聳えていたが、この社叢は、津波によって発生した山火事で地表面の草本類に火が入ったところである。一部、木の鳥居などの足元に火が入り、表面が黒く炭化した痕跡が目についた。火が迫った折、五人程が居残り、消化活動にあったため、幸いにも社務所、本殿ともに火災からは免れた。

#### 5. 保安林としての社叢

釜石市浜町の尾崎神社は被災を免れた社叢である。ここは、「水源かん養保安林」になっており、スギの二次林であった。また、釜石市唐丹町片岸の天照御祖神社の社叢は、「魚つき保安林」となっており、これらの地勢の生態的環境を配慮した復興計画がなされることを望むしだいである。



ランドマークとしてそびえるケヤキ